



近畿ブロックのHIV医療体制整備

研究分担者 渡邊 大

(独) 国立病院機構大阪医療センター臨床研究センター
エイズ先端医療研究部 HIV感染制御研究室長

研究要旨

本研究の目的は、近畿ブロックのHIV診療レベルの向上と連携強化、歯科や精神科疾患、救急医療、透析医療、長期療養の診療体制の整備などの課題の解決に資することにある。方法は主に、研修会の企画および実施と近畿ブロックにおける中核拠点病院打ち合わせ会議の開催である。各府県では中核拠点病院が中核となり診療が円滑に行われるようになってきている。その一方で、HIV感染症患者の一般医療への需要があり、拠点病院に加えて、一般の医療施設の参加が必要な状況であることが明らかになった。今後は、長期療養が必要なHIV感染症患者が、安心して療養できるような診療体制の整備が必要と考える。

A. 研究目的

近畿ブロックにおけるHIV診療の課題を明らかにし、HIV診療の向上を目的とする。また、拠点病院の再構築を含めた診療体制について検討する。

B. 研究方法

中核拠点病院打ち合わせ会議、近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議、研修会の企画と実施（出前研修会含む）、資料の作製、ホームページによる情報発信、拠点病院へのHIV診療に関するアンケート調査を行った。研修の方法は、クリッカーを用いた研修とコミュニケーション研修についてのアンケート調査（HIV感染症医療におけるコミュニケーションに関する研修会ニーズ検討のための研究）を行なった。HIV感染者に対する精密検査入院を実施し、2020年からは救済医療としてあらたな精密検査入院を開始した。

（倫理面への配慮）

研修・教育に用いた症例呈示では、患者個人が特定されない等の配慮を行った。HIV感染症医療におけるコミュニケーションに関する研修会ニーズ検討のための研究は当院で倫理審査を受け、承認を得た。

C. 研究結果

中核拠点病院打ち合わせ会議・近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議を開催することにより、行政・拠点病院間で連携をとり近畿ブロックの診療レベルの向上に加え、歯科および精神、救急、透析、長期療養などの課題や救済医療の実施にあたる諸問題について議論した。2018年度に設立された地域医療支援室により社会福祉施設や保健所などに赴き、2018年度は18回、2019年度は12月までに12回の出前研修を行った。新規HIV薬の登場に伴い、『あなたに知ってほしいこと』のアップデートを2回行った。ホームページをHTML/CSS/Javascript対応とし、院外PEPの情報を追加した。3年間で111件の精密検査入院を行った。2020年からGIF/CF/DEXA/胸腹部CT/腹部エコー/認知機能検査/リハビリ/PET-CTなどを組み合わせた新たな精密検査入院が開始された。

D. 考察

HIV診療を地域に拡大させるためには、さまざまな課題があり、行政とともに取り組む必要があると考えられた。当院の地域医療支援室と連携して、拠点病院への聞き取り調査など、新たな取り組みが期待される。

最後に、拠点病院の再構築を含めた診療体制について検討する。近畿ブロックは大阪・兵庫・京都・滋賀・奈良・和歌山の2府4県からなるが、大阪以外は大学の付属病院が中核拠点病院となっており、通院患者数もそれほど多くはない。2018年の中核拠点病院の定期受診患者数を多い順にあげると、兵庫313例、奈良157例、京都129例、滋賀97例、和歌山78例である。HIV診療を担当している医師が一人の場合、その医師の異動や退職を機に拠点病院を取り下げる可能性はあるが、大学付属病院の場合は人材も豊富であり、その危険性は少ないと考えられる。都道府県全体をみても、兵庫764例、奈良164例、京都377例、滋賀130例、和歌山91例であり、昨年と比較して定期通院患者数が最も増えたのは兵庫であるが、それでも36例である。また、HIV診療の諸問題があったとしても、エピデミックのひとつのモデルとして考えられる大阪府が近隣に位置しており、その解決策を共有することができる。一方、大阪の患者数増加と特定の医療機関への集中は止まらない。2018年の大阪府の定期通院患者数は3514例であり、2017年と比較して141例増加している。ブロック拠点病院である大阪医療センターに2515例（72%）、中核拠点病院の1つである医療機関に718例（20%）が集中しており、両者で大阪府の92%を占めている。また、この2つの医療機関は大阪の中央に位置し、大阪府の面積が小さいこととあいまって、近隣の府県からも通院が可能である。

このように、ブロック拠点病院への患者集中にも大きな問題が残されている。外来通院患者が多くなっている。3ヶ月先までに何例の患者の予約が入っているかをみると、3年以上在籍している医師全員（6名）が300例以上の予約がはいっており、医師3名については少なくとも500例前後の予約がはいっている。若年者以外の患者の多くは、HIV診療に加え、一般内科の診療も希望しており、外来の負担は決して少なくはない。

ブロック拠点病院の機能を考えるとERや入院治療はブロック拠点病院で引き受けるべきである。したがって、地域の急性期病院に外来診療のみを依頼することは正当とは限らない。抗HIV療法についても、指定自立支援医療機関の申請や治療失敗に伴う薬剤耐性株の流行の懸念を考慮すると、地域の病院や診療所にまかせるのは簡単なことではない。

大阪医療センターでは精神科医師数の減少により、精神科受診が必要な症例はまず近隣の診療所に診察する流れになった。抗HIV療法でウイルス学的

抑制になっている症例の精神科救急も、精神科単科病院でみていただけるようになった。歯科についても、大阪HIV感染者等歯科診療連携体制が構築され、大阪府内の173の協力歯科医院（2018年9月時点）と連携がとれるようになった。維持透析も全例サテライトで透析を実施している。これらの成功は、他の診療科でも成功する可能性を意味している。

このような背景から考える拠点病院の構想の1つの私案を述べる。ブロック拠点病院・中核拠点病院は、抗HIV療法や難治例・入院例の診療を中心に行うが、自立困難患者などではプライマリケアも引き続き行う。かぜ症候群、胃腸障害、ワクチン接種などは近隣の診療所で診療を行い、地域全体での診療を推進させる。拠点病院はその地域において診療可能なことを明確にし、ウイルス学的抑制された症例を中心にブロック拠点病院や中核拠点病院に診療所との中間的な役割を担う。以上を、行政を含めてシステムチックに構築する。

E. 結論

近畿ブロックでは、中核拠点病院が各府県のHIV診療の中核を担うようになった。今後もブロック全体で質の高い診療を続けるためには、人材の育成、病院間連携の強化が必要と考えた。歯科診療、精神科疾患、長期療養、透析、救急医療の診療体制の整備も重要な課題である。拠点病院間や行政との連携の強化のみならず、地域全体との密な連携を伴ったHIV診療体制の構築が必要である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

海外

- 1) Togami H, Yagura H, Hirano A, Takahashi M, Yoshino M, Abe K, Oishi Y, Takematsu S, Kakigoshi S, Yamamoto Y, Ito T, Yamamoto M, Mizumori Y, Kanei O, Utsumi M, Watanabe D, Yokomaku Y, Shirasaka T. Correlation between UGT1A1*6 and *28 genotype, and plasma dolutegravir concentrations in Japanese HIV-1 infected patients. 9th IAS Conference on HIV Science (MOPEB0328), 24 July 2017, Paris, France

- 2) Hiroki Yagura, Dai Watanabe, Takao Nakauchi, Kosuke Tomishima, Yasuharu Nishida, Munehiro Yoshino, Kunio Yamazaki, Tomoko Uehira and Takuma Shirasaka. ASSOCIATION OF TENOFOVIR LEVEL AND DISCONTINUATION DUE TO IMPAIRED RENAL FUNCTION. HIV drug therapy Glasgow 2018. October 28, 2018. Glasgow.
- 3) Yagura H, Watanabe D, Nakauchi T, Kushida H, Tomishima K, Hirota K, Ueji T, Nishida Y, Miyabe Y, Sako R, Yamauchi K, Yamazaki K, Uehira T, Takuma Shirasaka. Discontinuation of long-term dolutegravir treatment is associated with UGT1A1 gene polymorphisms. 10th IAS Conference on HIV Science (IAS 2019). July 21, 2019. Mexico City, Mexico.
- 国内
- 1) 渡邊 大。Tenofovir Alafenamide based regimenの臨床的有用性（ランチョンセミナー）ゲンボイヤ®配合錠の使用経験。第91回日本感染症学会総会・学術講演会、東京、2017年4月6日
- 2) 渡邊 大、上平朝子、鈴木佐知子、松本絵梨奈、笠井大介、廣田和之、南留美、高濱宗一郎、林公一、澤村守夫、山本政弘、白阪琢磨。高IFN- γ 血症を呈するHIV-1感染者の臨床的特徴に関する検討。第31回近畿エイズ研究会・学術集会、大阪、2017年6月3日
- 3) 渡邊 大。HIV感染症、併発症の最新治療について。北陸ブロック医療等相談会、福井、2017年9月30日。
- 4) 渡邊 大、上平朝子、鈴木佐知子、松本絵梨奈、笠井大介、廣田和之、南留美、高濱宗一郎、林公一、澤村守夫、山本政弘、白阪琢磨。高IFN- γ 血症と高IL-6血症を呈するHIV-1感染者の臨床的特徴に関する検討。第71回国立病院総合医学会、香川、2017年11月10日
- 5) 渡邊 大、矢倉裕輝、櫛田幸幸、富島公介、戸上博昭、平野 淳、高橋昌明、廣田和之、伊熊素子、笠井大介、西田恭治、吉野宗宏、上平朝子、白阪琢磨。ドルテグラビルの血中濃度とUGT1A1遺伝子多型が、ドルテグラビル投与後の神経精神系有害事象の発生に与える影響についての検討。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日
- 6) 渡邊 大。プロテアーゼ阻害剤による抗HIV治療戦略（ランチョンセミナー）。プレジコビックス®配合錠の臨床的役割と使用経験。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日
- 7) 渡邊 大。プレジコビックス®配合錠によって何が変わったか？～発売後1年を経過して～。HIV Web Conference、2018年4月18日
- 8) 渡邊 大。長期管理時代におけるTAFの役割（ランチョンセミナー）。TAFの安全性評価。第92回日本感染症学会総会・学術講演会、岡山、2018年5月31日
- 9) 渡邊 大。HIV感染症学術講演会－アイセントレス®10年の軌跡－。HIV感染者の病態と考えるべき課題－最近の話題、大阪、2018年6月24日
- 10) 渡邊 大。「抗HIV薬の薬物動態、薬剤間相互作用と薬剤耐性」～PK/PD/PGのアプローチからウイルス学的失敗ゼロを目指す～（シンポジウム6）。薬剤耐性HIVの臨床経験と抗HIV薬の薬物動態。第32回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018年12月3日
- 11) 渡邊 大、蘆田美紗、鈴木佐知子、松本絵梨奈、来住知美、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。抗HIV療法中のHIV感染者における細胞内HIV-1-DNA量の測定法間の差異に関する検討。第32回近畿エイズ研究会学術集会、大阪、2018年6月2日
- 12) 渡邊 大、上平朝子、矢倉裕輝、富島公介、中内崇夫、北島平太、寺前晃介、来住知美、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、西田恭治、白阪琢磨。TDFからTAFに変更後の腎機能検査値の推移に対する併用キードラッグの影響に関する検討。第32回日本エイズ学会学術集会・総会、2018年12月3日、大阪
- 13) 渡邊 大。HIV感染者の未解決の病態と抗HIV療法の未来。第2回大阪薬科大学学術交流シンポジウム、大阪、2019年10月19日
- 14) 渡邊 大。HIV感染症の課題と期待される病診連携。令和元年度HIV医療講習会、大阪、2019年10月31日
- 15) 渡邊 大。今後のHIV診療の期待と課題～2剤併用療法の新しい知見～。ViiV HIV Symposium 2019 in 大阪、大阪、2019年11月2日
- 16) 渡邊 大。HIV感染症の予後と死因Update。シンポジウム「治療の手引き」。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年11月29日
- 17) 渡邊 大。主要中核拠点病院での抗レトロウイルス治療の実際。シンポジウム「治療の手引き」。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年11月29日
- 18) 渡邊 大。HIV診療の長期的戦略を考える～ビクタリビ配合錠の臨床的特徴～。第4回 Gilead Infectious Disease Web Seminar、大阪、2019年12月23日
- 19) 渡邊 大、川畑拓也、森 治代、小島洋子、駒野淳、塩田達雄、中山英美、村上努、櫛田智仁、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。プロテアーゼ領域と逆転写酵素領域の配列を用いた新型変異HIV感染のスクリーニング法に関する検討。第33回近畿エイズ研究会学術集会、2019年6月8日、大阪

- 20) 渡邊 大、上平朝子、鍵浦文子、松山亮太、梯正之、砂川富正、白阪琢磨。当院の新規診断HIV感染者における診断時CD4陽性Tリンパ球数と血中HIV-RNA量の年次推移に関する検討。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、2019年11月28日、熊本

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし